

高齢者と家族のための情報誌「すまいる」を通した、 生活の質向上に関する検討

Research report on the magazine, Smile,
providing the information for grandpas, grandmas and families

河尻純平¹⁾²⁾, 大村佳之³⁾, 丸山篤芳¹⁾⁴⁾, 西村訓弘¹⁾

Jumpei Kawajiri¹⁾²⁾, Yoshiyuki Omura³⁾, Tokuyoshi Maruyama¹⁾⁴⁾, Norihiro Nishimura¹⁾

キーワード

高齢者、福祉、生き甲斐、三重、鈴鹿

1. はじめに

じいじ・ばあばと家族のための情報誌「すまいる」(以下、すまいる)は、三重県で初めてとなる高齢者とその家族を対象とした無料の情報誌である。タイトルに関しても、日頃から高齢者世代が目にすることを考慮し、「じいじ・ばあば」という造語を用いている。これは、この世代が「高齢者」という言葉に対して拒否感を示すことが多いためである。

隅々まで目を通す傾向にあり、文学以外の文章を多く読んでいる(当方によるヒアリング調査の結果より)が、自らの経験を他者へ伝えることについては、機会が少ないこともあり消極的である。これは否定的な意味ではなく、伝えたいと思いつながらも場が無いことが影響していると考えられる。

このことから、情報を入手するだけのツールとして本誌を使うのではなく、自らの活動や経験を後世に伝え、交流の場として機能させることで、高齢者の生活の質を向上させる一つのきっかけに繋がるのではないかと考えている。



本誌タイトルロゴ

本誌のターゲット層は 65 歳以上の高齢者と定義されている世代である。この世代を対象とした情報誌は有料・無料問わず全国でほとんど発行されておらず、三重県においては皆無である(2011年 7 月現在)。高齢者の多くは、新聞や広報誌の



今までに発行した「すまいる」

- 1) 三重大学大学院医学系研究科トランスレーショナル医科学
*Translational Medical Science, Social and Environmental Medicine,
Graduate School of Medicine, Mie University*
- 2) Smile Creative Office
- 3) 三重大学社会連携研究センター地域イノベータ養成室
Graduate School of Regional Innovation Studies, Mie University.
- 4) 三重大学医学部附属病院オーダーメイド医療部
Division of Personalized Medicine, Mie University Hospital

2. 取り組み内容

すまいるは、65歳以上の高齢者を対象とした無料の総合情報誌であり、福祉(介護)、冠婚葬祭、孫、レシピ、コラムなどを中心に構成している。本紙はA4版16ページで、発行エリアは三重県鈴鹿市を中心とし、1万部を季刊発行している。発行エリアは著者が生まれ育った場所であり、ニーズを含め状況把握が行いやすいことから決定した。情報の比較検討を行うための手段が少ない世代をターゲットにしている本誌では、既存の若者向け無料情報誌の多くが広告中心なのに対し、読める記事を重点的に掲載している。コラムやエッセイに関しては、地元の高齢者に執筆してもらっている。また、福祉施設(デイサービスや老人ホームなど)を毎号紹介し、施設選びの参考情報として提供を行っている。この他にも、文字サイズを一般の雑誌に比べ大きくし(原則14ポイント)、Q&Aコーナーを設けるなど、読者と共に成長していけるような雑誌作りを目指し取り組んでいる。

制作にあたっては、Smile Creative Officeがスポンサー集めや、デザインを担っており、三重大学トランスレーショナル医科学研究室から、医学的な助言や指導を受けている。また、連携している社会福祉法人と定期的に情報交換を行い、誌面作りの参考にしている。



文字の大きな誌面

3. 今後に向けて

平成22年5月に創刊し、現時点で第3号まで発行している。市内在住の高齢者2名にエッセイやコラムを執筆してもらっている。これら執筆者の家族からは「元気になった」「次はいつかと待つ

ている」など、好意的な意見が寄せられている。また、本誌を見た読者同士の交流も少しずつ始まっている。このことをふまえ、執筆者を特定の2名だけでなく、多数の高齢者に広げると共に、読者同士が交流を持てるような企画などを今後は考えていきたい。



取材先の高齢者とスタッフ

本誌の配布について、鈴鹿市役所の御協力を頂き、公民館や図書館などの公共施設を中心に行っている。この他にも、取組に賛同いただいた商店などでも同様に行っており、一部地域では自宅を対象としたポスティングも行っている。

これら業務を現在は著者自身が行っており、マンパワーの限界を感じている。また、発行間隔が乱れており、定期刊行出来ていない状況である。これは人員不足、企画力不足という発行体制の問題に起因すると考えられる。このことから部分的に外部委託を行うなど、環境改善をすることが望ましいと考えられる。今後は収入面を含めた制作体制の安定化を図っていきたいと考えている。



生き生きと話す執筆者

4. まとめ

すまいるの発行を通して、様々な人々と出会うことができた。そして限られた人数ではあるが、本誌の執筆を通して、生活の質が若干ではあるが向上したと捉えることができた。今後は、これらの出会いから得た人脈などを効果的に活用しながら本誌の認知度をあげていきたいと思っている。それと共に当初の目標であった、高齢者による高齢者のための情報発信ツールとしての機能は現時点で行えているとはいえない。この点について、改善していきたい。

そして、今後はこの取組を研究として明確な根拠を示した上で、検証を行っていきたいと考えている。そのために、当研究室において「高齢者のニーズ」を導き出すための、大規模な高齢者意識調査を自治体や社会福祉法人与連携しながら実施する予定である。この調査を通して、アンケートやヒアリングなどの情報を蓄積・解析し、根拠ある活動の普及と拡大を図ることで、地域住民の生活の質の向上と健康増進に貢献していきたいと考えている。

謝辞

本研究をするにあたり、地域住民の方や自治体関係者、社会福祉法人の方など、様々な方に大変お世話になりました。文末ではありますが、ここに感謝申し上げます。